

## 1. 本章の概要：専制と宗教

- デモクラシーに逆行するように見える専制、デモクラシーに沿うように見える世俗化
- 第一節『リヴァイアサン』の暴政および専制論
  - 暴政 (tyranny) → 支配者の利益追求による国制分類を批判
  - 専制的 (despotical) 主人 (despotēs)、征服者の奴隷支配 主権者と同じ権利
  - 暴政および専制と君主制に本質的な差異を見出していない
  - 国王チャールズ一世の暴政、「征服者」クロムウェルの共和制をどちらも擁護？
- 第二節『リヴァイアサン』の宗教論
  - 原因探究の好奇心と、見えないものへの恐怖が神、信仰をうむ
  - 聖職者の従属、世俗主権者が聖俗両面を支配(政教一致)、聖職者支配という暗闇を〈啓蒙〉
- 第三節 ホッブズの多元的政体論
  - 国王が絶対的な権力を持たず、様々なアクターが競い合うイングランド
  - 『リヴァイアサン』主権者に委任され統治を担う代行者、主権者に知を提供する助言者
  - 既存の多元的秩序を基に改良を施そうとしたのが、ホッブズの社会改良、〈啓蒙〉
- 第四節 ホッブズの〈啓蒙〉の継承 → ヒュームの自己投影？
  - ヒューム『イングランド史』、ホッブズは暴政擁護、宗教批判するが「懐疑の精神」なし
  - 文明化された君主制と野蛮な専制を区別、迷信の起源を恐怖、聖職者支配批判、政教一致を評価

## 2. 専制について

- ロック ホッブズと同様の専制、暴政の区別、ただし自発的契約に基づく「政治権力」から排除
  - 専制権力=恣意的権力、征服者の支配 ↔ 暴政=支配者自身の利益追求 → ホッブズの分類踏襲
- モンテスキュー 多元的権力構造が人間の利己的欲求を抑制、共同体を解体させる人間本性の危険
  - ホッブズ 多元的ゆえに内乱と解体発生、解体させるのは煽動的言説 → 多元性強調はミスリード？

## 3. 宗教について

- 宗教の起源
  - ヒューム | 迷信、神の外観を作り出す恐怖、恐怖から発生する多神教 → 「完全な存在者」の概念へ
  - ホッブズ | 人間学による宗教論は共通、人間本性から宗教導出は経験論？ 自然宗教と啓示宗教の区別
- ヒューム | 既存の教会秩序を消極的容認 → ホッブズの積極的政教一致とは温度差、類似点より相違点？

## 4. 啓蒙と理性、方法

- ホッブズ：名辞、三段論法との連関で定義される理性
- カッシーラー：全体を分解し再構成する方法、エネルギーとしての理性 → ホッブズの中に啓蒙的理性

## 5. 助言と啓蒙——誰を啓蒙するのか

- 第4章隠岐 カント①読者へ：権力者の底意知れ、②フリードリヒへ：悟性使う自由を認めた名君たれ
- 第1章隠岐=須賀 プラトン「洞窟の比喩」火を操る人形師は〈啓蒙〉の立役者？ 哲学者と区別可能？
- 為政者、エスタブリッシュメントへの啓蒙 と 一般大衆への啓蒙
- シュトラウス | ホッブズの政治学により人々を啓蒙？ 哲学者と非哲学者、啓蒙に懐疑

## 6. おわりに——ホッブズの〈啓蒙〉と現代

- 単に〈反啓蒙〉ではない専制論、宗教や理性の〈啓蒙〉、助言こそ〈啓蒙〉、啓蒙思想への貢献
- 〈啓蒙〉に対する右派左派両方からの逆風 → ホッブズに対する逆風の歴史
- 権威主義台頭 → ホッブズに〈啓蒙〉を見出せない？ 「近代」への疑念 → ホッブズ〈啓蒙〉ゆえに拒絶？